

# いつきの“ヒューマン・ビーイング”

## 人権について考える ⑳

### 土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

### 「リビングライブラリ」をしたい！

わたしの勤務校では、3年生2学期の人権学習を「リビングライブラリ」<sup>(注1)</sup>という形でおこなっています。リビングライブラリは、2000年にデンマークではじまった試みで、社会の中で偏見を受けがちな人々が「本」として語り、聞き手がその本を「読む」ことを通して偏見を乗り越えようというものです。日本ではじめてリビングライブラリが開催されたのは2008年12月のことです。実はわたしはこのリビングライブラリに「本」として参加しました。その時の「本棚」には、発達障害、高次脳機能障害、視覚障害などの障害者や薬物依存症回復者、ホームレスなど、さまざまな人がいました。そんな人たちと「書庫」で語りあう中で、いつかわたしの勤務校でもリビングライブラリをやりたいと思うようになりました。

しかし、ことはそう簡単ではありませんでした。まず、リビングライブラリをするにはそれなりの冊数の本を揃えなければなりません。本はたくさん揃えれば揃えるほどお金がかかります。限られた予算しかない高校では無理だろうと諦めていました。ところが、2013年のある日、他府県の公立高校でクラスに1人ずつ講師を呼ぶとりくみをしていることを知りました。「謝礼はどうしているんですか？」とたずねると「交通費しか出せませんと正直にお願いして、それでも来てくれる人に来てもらっています」という答えが返ってきました。その時、それならできると思いました。そこで、翌年、とりあえず生徒たちに出会わせたいと思う人々に「交通費しか出ません。自分なら断るので、遠慮なく断ってください」という言葉とともに、本になってほしい旨をメールしました。すると、全員から「行くよ」という返事が返ってきました。「本棚」に並べることができた「本」は、ゲイ、トランス女性、虐待サバイバー、イラク帰還兵のスピーキングツアーの通訳者、脳性マヒ者、薬物依存症回復者、シングルマザー、在日コリアンのみなさんでした。

「本」は揃えられたものの、実際にリビングライブラリを開催するのは難航しました。まず問題になった

のはテーマでした。部落や在日コリアンであれば話の内容は予想がつきます。しかし、ゲイやトランス女性の話は予想がつかず、おそらく不安に感じられたのでしょう。さまざまな「懸念」が出されました。例えば、「シングルマザー家庭の子がシングルマザーの話を聞いたら傷つくかもしれない」といった意見が出されたり、なかには「人権ではないテーマが混じっている」などと言う人もいました。それでも最終的に、校長の「確かに困難ではあるかもしれない。しかし、困難だからやらないというのは違う」というひと言で、なんとか実現することができました。もっとも、あとで「ちゃんと根まわしてくれよ」と言われましたが…。

ただ、生徒が自由に「本」を選ぶことについては、「生徒が聞いた話を自分が聞いていないと、なにかあった時にフォローしきれないから不安である」という理由で反対されました。結局、担任が自分のクラスの「本」を選んで、クラスごとにミニ講演会をするという形で妥協せざるをえませんでした。

ところが、リビングライブラリが終わったあとに、ある生徒がわたしのところに来て「ほんとうはシングルマザーの話が聞きたかった。友だちにシングルマザーがいるねん」と言ってくれました。わたしはすぐにその生徒をシングルマザーの「本」である社納<sup>(注2)</sup>さんに紹介しました。ふたりは連絡先を交換し、その後、その生徒はシングルマザーの友だちに社納さんの連絡先を伝えたのです。その数年後、社納さんから、「紹介してもらったシングルマザーの人から連絡があった。離婚相手と慰謝料の交渉をはじめると決意したらしい。あの時、生徒とわたしを引きあわせてくれてありがとう」という連絡がありました。人権学習は「生きる」こととつながっているを感じた瞬間でした。

その翌年、アメラジアン<sup>(注3)</sup>と部落出身者の2冊を加え、生徒たちは10冊のうちから2冊選んで、2時間かけて1冊ずつ話を聞くという、現在の形にすることができました。次号では、リビングライブラリを通じて生徒たちに伝えたいことを書こうと思います。

(注1) 現在は「ヒューマンライブラリ」という名前になっていますが、ここではわたしの勤務校のとりくみの名前にしたがついています。

(注2) フリーライターをしている友人

(注3) もととの定義では、アジアで生まれた米軍人と現地の人との子ども、広義にはその子孫も含める。